

も考へたり。然れども未だ其實物を見るの機なきを以て、果して然るや否を確かむる事能はざるを憾む。以上述べ來れるところは、單に資料の報文也。其果して然るや否に就ては識者の研究と教とを希望するところ也。(完)

## 法顯の行路 (下の1)

堀 謙 徳

### 第七 拘薩羅より摩竭提に至る

法顯は沙祇國より拘薩羅國 (Kosala) に入り、首府舍衛城 (Śrāvastī) に到る。この舍衛城の位置に就ては、異說少なからず、スミス氏は『西域記』卷五に轉索迦國より室羅伐悉底國 (即ち舍衛城) に至る距離を指定して東北五百餘里 (約八十三哩) となせる

を見て、法顯の指定せる沙祇・拘薩羅の距離「南行八由延」を改めて「東北行十八由延」となし、前回に之を引用せり。然るに、『マハーワツガ』(Mahāvagga, VII. 1. 1.) に沙祇多より拘薩羅まで六由旬 (約四十二哩) とし、『摩訶僧祇律』卷十一には、優波離の指定として二日間の行程となせり。カニンハム氏は法顯の八由延 (約五十六哩) を東北に進みたりと解釋し、ラーフチ川の南岸サーヘト・マーヘト (Sāhet Mahet) を以て古の舍衛城となせり (Archaeological Survey, Report, I. 330)。この説は舊說なれども近頃種々の新資料を發掘したる結果、學者多くこの説を採るに至れり。この地は佛陀が久しく留りし由緒もあり、古に佛教盛大にして波斯匿王・須達長者・毗舍佉の如き信者もあり、史上の事實多くこの地に演ぜらる。法顯時代には市街僅に二百餘家の遺存するを見たりといへば、衰頹の狀想見するに足れり。

法顯は舍衛城滯在中、佛蹟を巡拜したり。祇園 (祇

近) 精舎は、當時尙ほ見るべきものありて、法顯は之を叙して、

精舎東向開門戸、兩邊有二石柱、左柱上作輪形、右柱上作牛形、精舎左右、池流清淨、樹林尙茂、衆華異色、蔚然可觀、即所謂祇近精舎也。

と云へり。祇園の東に地を相して毗舍佉が建立せし東園寺の如きも尙ほ存在し、祇園の周圍に九十八僧伽藍ありて一箇所の外は、何れも在住の僧徒ありたりといへば、法顯時代この舊蹟に佛法相當の状態を維持しつゝありしを知る。

法顯は舍衛城より古蹟を經由しつゝ迦維羅衛城に向へり、先づ舍衛城の西五十里(約十哩)にして都維村(Tupī)に迦葉佛の誕生・入滅せし由緒地を禮拜し、一旦舍衛城内に歸り、是より東南十二由延(九十六哩)にして那毗伽村(Nābigā)に入り、拘樓秦佛(Kāṣṭhāpāda Buddha)の誕生・入滅の舊蹟を拜し、是より北一由延(八哩)にして一村落入り、拘

那含牟尼佛(Kāṣkambhī Buddha)の生滅地を禮したり、迦葉・拘樓秦・拘那含牟尼の三佛は、何れも釋迦以前に於て出世したりと傳ふる過去佛にして、歴史的の人物に非るを以て、其生滅地を事實上より調査すること不當の嫌ありと雖も、法顯・玄奘の二法師は本生譚の由緒地をも踏査せしが故に、過去佛の傳説的舊蹟を記述すること、亦た怪むに足らず。

拘那含牟尼佛の古蹟より東行一由延(八哩)にして、佛陀の本國迦維羅衛城(Kapilavastu)あり、この地は佛教史上位置の確定を要する名蹟なるが、佛陀の舍利瓶を發掘して刻文を調査するに及び、其發掘地たる Pīṭhaka を以て之に指定するを得たり。昔釋迦種族此地を中心として民衆を統べ、淨飯王の世釋迦牟尼佛、王太子の位を捨て、出家成道し、王族中より阿難・難陀・提婆等の出家して佛弟子となり、佛陀の在家時代は勿論、成道以後の古蹟多く、法顯皆之を巡歴し、就中城東五十里(十哩)の論民園

(Lumbini)に佛陀誕生の跡を禮したり、法顯の當時城内民家僅に數十戸のみにして、少數の僧侶あり、城外の領土には猛獸横行し荒廢見るに忍びざりき、元と迦維羅衛城は佛陀の晩年、拘薩羅の爲に屠られ、城民多く之に死し、殆んど滅盡に歸したるが故に、法顯が見たる城内少數の住民は、後世更に他の地方より移往せし者にして、佛陀時代より引續き城内に歴代在住せしものに非るべし。

論民園より東五由延(四十哩)に藍莫村(Bana)あり、玄奘之を藍摩と寫す、藍莫は佛蹟にして、入滅の際、佛骨八分の時、一分を受けて塔を建て、恭く之を祀れり。藍莫より東三由延(二十四哩)にして佛陀落飾の地あり、これより東四由延(三十二哩)にして炭塔あり、炭塔とは佛骨分配の際、畢鉢羅村(Pippala-vana)の代表者が火葬の灰炭を得、本國に持ち歸りて、塔を建てたるをいふ、即ち法顯の所謂炭塔は畢鉢羅村にあり。更に東十二由延(九十六哩)

にして拘夷那竭城(Kusinagara)あり、この地は佛滅地として永く世人の記憶する所、城北の希連禪河(Hiranyavati)の邊、娑羅樹林、雙樹の下にありて佛陀入滅せしこと、人の知る所なり、これ等の由緒地に皆塔を建て、僧庵ありて僧徒在住せり。

拘夷那竭より東南十二由延(九十六哩)にして佛蹟地あり、昔佛陀が毗舍離より次第に北行し、入滅地に向ひ給へるに當り、毗舍離城の梨車(Jiohavi)種族は佛陀が遠からずして入滅せらるゝを聞き、入滅地まで隨從せんことを請ひ、佛陀之を許し給はざりければ強て佛陀を追ふて此地點に達し、遂に引返したりと稱する舊蹟たり、佛教徒は後に石柱を此處に建て、其由來を刻せり。これより東(正確に云へば東南)十由延(八十哩)にして毗舍離國(Vaisali)に至る、毗舍離は佛陀時代に於て梨車種族の聯邦ありし中心にして、北の拘薩羅、南の摩竭提に對立せる強國なり。城北の大林にある重閣精舍、菴婆羅女が

奉獻せし林園あり。佛陀入滅後百年、毗舍離にありし一僧徒が、信者に勸めて金銀銅貨を寄附せしめ、直接各自に之を取扱ひ、其他種々の非法を敢てし、之を以て佛陀の訓戒に乖れることなしと主張し、保守思想を抱ける僧徒は之に反對したれば、爭論の範圍次第に擴大して、殆んど印度佛教界全體の問題となりたれば、各地の僧徒多く毗舍離に集り、其中より七百人を撰み、更にこの七百人より高僧八人を撰出して佛陀の戒律を調査し、毗舍離僧徒の主張は非法なりと斷定せらるゝに至れり。毗舍離城より東（正確に云へば東南）四由延（三十二哩）にして希連禪河が恒河に合する地點に達す、これより恒河を渡りて南に摩竭提國（Magadha）あり。

## 第八 摩竭提國

是より恒河を渡り、河に沿ひて、南（正確に云へば東南）に進むこと一由延（八哩）にして、巴連弗邑

（Pataliputra）に至る。今のバトナ（Patna）是なり。巴連弗邑は佛陀の時代にありて僅に一村落に過ぎざりしが、後世に至り次第に繁榮に赴き、阿育王が都を此地に遷し、全印度を支配するに及びて一大都市となり、これより以來數百年間、印度の帝都たり。法顯時代にはグプタ朝の首府として統治の中心となる。當時尙ほ阿育王の宮殿が城内に遺存し、材料は悉く石を積み、種々の彫刻を施し、結構甚だ美にして殆んど人工の極を盡せり。阿育王の弟佛門に入りて羅漢位に達す、王乃ち是が爲に城内の丘上に石室を築きて居らしむ、其石室は長三十尺、廣さ二十尺、高さ十尺餘にして、法顯の時代尙ほ存在せり。『西域記』にも之を叙し、王弟の名を摩醯因陀羅（Mahendra）とす、巴利所傳の王子摩哂陀（Mahinda）是なり。法顯時代の巴連弗城には大小乗俱に行はれ、何れも多數の僧徒在住したり。毎年四月八日には大法會を營み、佛陀・菩薩・諸天の像を載せ、種々の裝飾を加

へて龜を作り、四輪車にて之を曳き、是の如き車二十を算す、この日、僧俗多く來集して音樂を演奏し、香華を捧げて崇敬す、佛像は城外の寺院にあるを以て當日高僧之を迎へて城内に導き奉安すること二日、この間日夜燈明を點じ、音樂を奏して後ち本寺に歸れり。この外また城内に福德醫藥舍即ち慈惠病院を設けて貧窮の人民を施療入院せしむる制あり、これ等四月八日の法會竝に慈惠病院の設立の如きは獨り巴連弗城に限らず、中印度全部に行はるゝを見たりといふ。

阿育王が八萬四千塔を造るや、先づ初に首府巴連弗城の南に一大塔を建てたり、この大塔に就ては『西域記』に

有窣堵波、基址傾陷、唯餘覆鉢之勢、實爲厠飾、石作欄檻、即八萬四千之一也……

と云へるものに當り、阿育王が優波笈多(Upaguta)に謀りて建立せりと傳ふ。この塔の前に佛足石あり、

『西域記』には長一尺八寸、廣六寸ありて、足に法輪を刻し、十指にも紋を刻したりといふ、『慈恩傳』には、法輪を千輻輪、指端の紋を卍字・魚形等なりとす。この佛足石の所在地には一精舍あり、北に正門を開く。大塔の南に一石柱あり、高さ三十餘尺、太さ十四五尺、阿育王の刻文ありて、王が三たび全印度を以て佛僧に施し、錢を以て之を贖へる因縁を記錄せり。

之より東南九由延(七十二哩)にして小石山に達す、山上に石室ありて、嘗て佛陀が其中に留れるに當り、天帝釋來りて四十二箇條の質問をなし、佛陀の教を受けたりといふ、山中に一寺院を建て以て記念となす。これより西南一由延(八哩)にして那羅村に至る、那羅は Nalanda の略音、佛蹟にして、佛弟子舍利弗が此地に生れ、又た同一の家にて入滅したる處なり。其西一由延(八哩)に王舍城(Rajagṛha)あり、王舍城は佛陀時代の摩竭提國の首府にして、

本と五山を以て繞せる市街なりしが、國運の發展により、この舊域にては満足すること能はずして、五山の北に當り、更に新城を築きたり、王舍城は佛陀に歸依せし頻毗娑羅王及び阿闍世王の都せし所にして、佛陀も屢々此地に往來し、又た久しく滞在し、佛教史上の史蹟たり。王舍城の東南十五里に耆闍崛山 (Gṛdhrakūṭa) あり、一に靈鷲山とも譯す、此山には佛陀が留りし石室あり、阿難が悪魔の爲に強迫せられ、提婆が佛足を傷けたるも、皆この山中の史蹟なり。王舍舊城の北三百歩に竹園精舍あり、竹園精舍は舍衛城の祇園精舍と並びて佛傳に因縁淺からず、久しく佛陀の滞在あり、其附近に寒林(墓地)、賓波羅窟 (Bīppala) 等あり。少しく西に當り、山北に二石窟ありて車帝と名く、佛滅後、大迦葉を上首とせる五百の佛弟子集りて佛陀の教説を結集せし處なり。車帝とは *Sapattana* (七葉) の畧音、一に七葉窟とも譯す。

これより西四由延(三十二哩)にして伽耶城 (Gāyā) あり、其南二十里にして佛陀が成道以前六年間苦行せし苦行林あり。其附近に佛陀が苦行を捨て、沐浴せし處、村女が乳糜を奉りし處、佛陀が乾麤を味ひし處あり。これより東北半由延(四哩)に前正覺山の石窟あり、更に西南半由延(四哩)にして貝多(菩提)樹下に達す、即ち佛陀の成道せし地點なり、法顯の時代、此處に僧伽藍三箇所ありて僧徒之に住す、其附近に文鱗龍王の保護、四天王の奉鉢等の如き佛傳の史蹟あり。其南三里鶏足山 (*Kukkuṭa-pada giri*) あり、大迦葉の入滅地たり。

## 第九 迦尸と拘睢彌

法顯は鶏足山より一旦巴連弗城に還り、是より恆河に沿ふて西進十由延(八十哩)にして曠野精舍に至る、佛蹟にして僧徒在住す。法顯は曠野を以て寺名の如く傳へたりと雖も、梵語佛典には地名としての

Alavi (森林)を出し、漢譯佛典には曠野と譯し、この地方に住する土着の蕃民に Alavika (林中住人)の名を有する者あり、巴利語佛典には、地名としての Alavi 人名として Alavika を出す、梵語のものも多く巴利語に！となるを以て、全く同源の名稱たるを知るべし。故に曠野は本と地名なりしが、寺名にも應用せらるゝに至りしものか。

法顯は曠野より更に恆河に沿ふて西進十二由延(九十六哩)にして迦尸國 (Kāśī) の首府波羅奈城 (Vārāṇasī) 即ち今の Benares 市に達せり。城外東北十里に仙人鹿野苑 (Migadāra) あり世に略して鹿苑と云ふ、この地は本と仙人止住せしを以て仙人住處 (Śīpatana) といひ、鹿を放ちて飼養するを以て鹿苑の稱を得たり、漢譯佛典には鹿野苑仙人住處の地名を出せるもの少からず、現に發掘を行ひ、種々の史料を發見したり。昔佛陀が成道以前に於て苦行せし時、拘隣 (Kauṇḍinya) 即ち憍陳如等の釋種五

人も亦た之に従ふて苦行を修せしが、佛陀が苦行を廢すると共に、五釋種は之を捨て去り、遠く波羅奈城北の鹿苑に往きて相俱に修行をなせり、佛陀が菩提樹下に道を成すや、先づ鹿苑に赴きて五釋種を化導して弟子となせり、是に於て佛あり、法あり、僧ありて、三寶具足するに至る。尋で城入耶舎の出家あり、其父母鹿苑に來り、佛陀の教を聞き在家のまゝ信者となる、之を優婆塞・優婆夷と稱し、佛教史上在家信者の稱呼となす。鹿苑の舊蹟には寺院建立せられ、法顯之を參拜したり。

鹿苑より西北十三由延(百四哩)にして拘隣彌城 (Kauṣāmbī) に至る、拘隣彌の位置に就ては、學者の間に異說多く、殆んど適從する所を知らざらむ、今假りにカニンハム氏の舊說に従へば、コーサム (Kosambi) を以て之に當てたり。この地は佛蹟にして昔瞿師羅 (Gosāla) といへる長者あり、佛法に歸して所有の林園を佛陀に獻ず、之を瞿師羅園 (Gosāla-

arāma) と云ふ、長者は園中に寺院を建つ、佛陀が拘攢彌城に留り給へる時、多く此寺院に入りたり、法顯時代には小乗派の僧侶此寺院に在りて住す。拘攢彌より東行八由延(六十四哩)にして佛陀が惡鬼即ち土蕃を濟度せし舊蹟に至る、此處に僧伽藍ありて百餘人の僧徒あり。

法顯は此地方にありて、南印度の史蹟に就て傳聞する所ありしが、遂に遠く南印度まで進むこと能はざりき。法顯の傳ふる所によれば、惡鬼歸佛の舊蹟より南二百由延(千六百哩)にして達嚨國あり、其國中に有名なる波羅越(法顯は鵠の義とせり)寺ありとして之を叙して曰く、

穿大石山作之、凡有五重、最下重作象形、有五百間石室、第二層作師子形、有四百間 第三層作馬形、有三百間、第四層作牛形、有二百間、第五層作鵠形、有一百間、最上有泉水、循石室前、繞房而流、周圍廻曲、如是乃至下重、順房

流、從戸而出、諸僧室中、處處穿石、作窓牖通明、室中朗然、都無幽闇、其室四角、頭穿石作梯蹬上處、今人形小、緣梯上、正得至、昔人一脚躡處、因名此寺爲波羅越、波羅越者天竺名鵠也、其寺中、常有羅漢住、此土丘荒、無人民居、去山極遠、方有村、皆是邪見、不識佛法。……

と達嚨は梵語 Dakṣiṇa の音譯にして、南の義なれば、單に南印度といふに過ぎずして、南印度の何れに當るや之れを詳述することなし。波羅越は梵語 Parvata の音譯にして山嶽の義なるも。法顯は鵠の義とせり。この寺院の狀態は『西域記』に見ゆる龍樹の伽藍に類し、憍薩羅の南境に引正王が建立したりと稱する岩石開鑿の大寺に當るべきか、法顯は唯だ傳聞を記述せしに止り、自ら巡歷せし地に非るを以て踏查史料となすべからず。(未完)